

骸骨の黒穂

夢野久作

青空文庫

1

まだ警察の仕事の大ザツパな、明治二十年頃のこと……。

人気の荒い炭坑都市、筑前ちくぜん、直方のうがたの警察署内で起った奇妙

な殺人事件の話……。

煤煙に蔽われた直方の南の町外れに、一軒の居酒屋が在った。

周囲は毎年、遠賀川おんがの浸水区域になる田圃たんぼと、野菜畑の中を、南

の方飯塚に通ずる低い堤防じみた街道の傍にポツンと立った藁葺わらぶ

小舎きこやで、型の如く汚れた縄暖簾なわのれん、軒先の杉葉玉と「一パイ」と

染抜いた浅黄木綿もめんの小旗が、町を出外れると直すぐに、遠くから見

えた。

中に這入ると居間兼台所と土間と二室ふたましかない。その暗い三坪

ばかりの土間に垢光りする木机と腰掛が並んで右側には酒樽桤棚、

左の壁の上に釣った棚に煮肴にぎかな、蒲鉾かまぼこ、するめ、うで蛸だこの類が

並んで、上り框あが かまちに型ばかりの帳場格子がある。その横の真黒く煤すす

けた柱へ「掛売かけうり一切御断おことわり」と書いた半切はんぎりが貼つて在る

が、煤けていて眼に付かない。

主人は藤六とうろくといった六十がらみの独身者の老爺おやじで、相当無頼なぐれ

たらしい。鯨いれずみを背負っていた。色白のデップリと肥った禿頭はげあたま

で、この辺の人間の扱い方を知っていたのであろう。坑夫、行商

人、界限の百姓などが飲みに来るので、一パイ屋の藤六藤六とい

つて人氣がよかつた。巡查が茶を飲みに立寄つたりすると、取つときの^{おやかた}上酒をソツと茶碗に注いだり、顔の通つた^{おやかた}人事係が通ると、追いかけて呼び込んで、手造りの濁酒の味見^{きき}をしてもらつたりした。

この藤六老爺^{おやじ}には妙な道楽が一つあつた。それは乞食を可愛がる事で、どんなにお客の多い時分でも、表口に突立つて這入らない人間が在ると、藤六は眼敏^{めざと}く見付けて、眼に立たないように何かしら懷^{ふところ}中から出してやつて立去らせるのであつた。立去るうしろ姿を見ると老人、女、子供は勿論のこと血氣盛んな……今で云うルンペン風の男も交つていた。

お客の居ない時なんぞは、母子^{おやこ}連れの巡礼か何かに、何度も何

度も御詠歌を唱わせて、上あがりぐち口に腰をかけたまま聞き惚れてい
るような事がよくあつた。そのうちにダンダン感動して来ると、
藤六の血色のいい顔が蒼白く萎しなびて、眉間に深い皺しわが刻み出され
て、やがてガツクリと頸うなだ低れると、涙らしいものをソツと拭いて
いるような事もあつた。そんな場合には巡礼に一升ぐらいの米と、
白く光るお金を渡しているのが人々の眼に付いた。

麦の穂が出る頃になると藤六は、やはり店に人の来ない時分を
見計らつて、家の周囲の麦畑へ出て、熱心に麦の黒穂くろんぼを摘んで
いる事があつた。これも藤六老爺おやじの一つの癖といえ云えたかも
知れないが、しかし近所の人々は、そうは思わなかつた。やはり
仏性ほとけしょうの藤六が、閑暇ひまさえあればソナ善根をしているものと

思つて誰も怪しむ者なんか居なかつた。

ともにかくにもこの藤六老爺おやじが居るお蔭で、直方には乞食が絶えないという評判であつたが、實際、色々な乞食が入代り立代り一パイ屋の門口に立つた。「あの乞食酒屋で一パイ」とか「乞食藤六の酒は量りが良ええ」とか云われる位であつた。

その名物老爺おやじの藤六が昨年……明治十九年の暮の十一日にポツクリと死んだ。

炭団たどんを埋めた小火鉢の蔭に、昨夜喰つたものを吐き散らして、夜具の襟を掴んだまま、敷布団から乗出して冷めたくなっているのが、老爺おやじの心安い巡回の巡査に発見されたので、色々死因が

調べられたが別に怪しい点の一つも無かった。

ただ一つ、盗まれたものはないかと家うちじゆう中を調べているうち

に、押入の隅に祭つてある仏壇らしいものに線香も何も上げてない。その代りに白紙に包んだ麦の黒穂くろんぼの、枯れたのが、幾束も

幾束も上げてあるのが皆を不思議がらせた。それからその仏壇の

奥の赤い金きんらん欄とぼりの帷帳を引き開いてみると、茶褐色に古ぼけた人

間の頭蓋骨が一個ひとつ出て来たので皆……ワア……と云つて後あとしぎ退り

した。しかし、それとても別段に藤六の死因とは関係がありそう

に思えなかった。つまるところ、藤六の風変りな信仰であつたら

う。それとも藤六がどこかで発見した無縁仏の骸骨を例の仏ほとけし

性ようで祭つてやっていたものかも知れない。黒穂くろんぼの束も、何の

意味もなしに、持って来ただけ始末して仏様に供養していたのかも知れない……といったような話のほかには説明の付けようがなかったのだ、結局、藤六の死因は何かの中毒だろうという事になって片付いた。

なおその騒ぎの最中に、帳場の掛^{かけ}碓^{すずり}の曳出^{ひきだ}しからボロボロになって出て来た藤六の戸籍謄本によつて、藤六が元来四国の生れという事……それにつれて、藤六は、その近まわりに一人も身よりタヨリの無い男という事がわかったので、葬式は自然近所葬^{ともらい}といった形になった。すると又それを聞いた直方^{のうがた}の顔役が十円札を一枚投出してくれたので、それを便りに赤の他人が十人ばかり寄合つて、今夜は通夜をしようという事になったが、もちろん

念仏なんかはホンの型ばかり。仏が売り残した煮物類と酒樽の酒を相手に、いい加減酒の座が騒がしくなった日暮れ方のこと、真黒に日に焼けた行商人体の若い男が、ノツソリと店先へ這入って来て案内を乞うた。

その態度が乞食でもなく、酒買いでもないらしいので、上り口に居た若い男が取合つてみると、それは仏の甥おいと名乗る男で、叔父の藤六が死んだばかりと聞くと、上り框に獅し噛がみ付いて、手も力もなくグシグシと泣出したお蔭で、一座がシンとしてしまった。皆、どう処置していいか、わからなくなったのであった。

そのうちに誰かが気を利かして警察へ知らせたらしく、暫く経つと巡査が一人来て取調べる事になった。……その様子を聞いて

みると、その男の名前は銀次といつて今年三十二歳であつた。元
 来四国の者で、仏様……藤六の兄の藤十郎から十七の年に、勘当
 された放蕩者の一人息子で、中国筋を流れ流れて大阪へ着いた二
 十五の年に、初めて放蕩の夢から醒めたという。それから人足、
 手伝い、仲仕の類を稼いで、あらん限りの苦勞をした揚句、^{あげく}鉋^{かん}
^{あめ}飴^め売りの商売を覚えて、^{あしだ}足高^{かだら}鹽^いを^{かつ}荷^かぎ荷^かぎ故郷へ歸つて来
 たが、歸つて来てみると故郷は皆死絶えたり零落してしまつたり
 してアトカタもない。初めて今までの親不孝が身に沁みてわかっ
 た銀次は、そこでタツタ一人の叔父の藤六が、九州の直方で酒屋
 をやっているという話を風のタヨりに聞いたので、そのまま門司
 まで便船で来て、やつとここまで^{たど}辿り付いたところで御座います

……と云つて又泣いた。

そんな話は皆、藤六の戸籍謄本とピッタリ一致した。殊に日に焼けてこそおれ若い銀次の人相から骨組が、見れば見る程死んだ藤六に似ている事がわかつたので、巡査は勿論、通夜の連中もモウ銀次を疑わなかつた。それどころでなく、これも仏の引合わせとか何とかいうのでスツカリ感激した一同は、直ぐに銀次を引っぱり上げて施主の席に座らせた。銀次が仏の顔を見て又もサメザメと泣いている間に、皆ヒソヒソと耳打ちし合つて、いくらかのお鳥ちようもく目を出し合つて包んだりした。

それから間もなく、銀次が程近い町の顔役の所へ、お礼の挨拶に行つて歸つて来ると、通夜の席が又賑やかになつた。銀次は明あ

日^すから私がこの店を引継ぐように親分さんへも御挨拶して来ました。どうぞよろしく……というので巡査を上席に据えて盛んに酒を出した。そうして翌る朝になると銀次は、酔い倒れた連中を背負ってソレゾレの家^{うち}へ届けたり、人足を雇って仏を焼場へ持って行ったり、なかなかコマメに立働らき初めた。それに連れて「やつぱり親身の者^{もん}でないとなあ」とか「仏も仕合わせたい」とか近廻りの者が噂し初めた。

2

不思議な事に、その頃から直^{のうがた}方附近に、眼に立って乞食が殖^ふ

えて来た。それがアンマリ殖え過ぎて町の迷惑になる事が夥しいので、警察でも捨ておきかねて逐^おい散らし逐い散らししたものであったが、さながらに飯の上の蠅で追っても追っても集まって来た。一方に炭坑が景気付くに連れて殺人殺傷事件がグングン殖えて来たりしたので、警察ではスツカリ持て余してしまつたが、しかしその乞食連中の中で町外れの藤六酒屋の軒先に立つ者が滅多に居なくなつた事には誰も気が付かなかつた。藤六と違って銀次は又、特別の乞食嫌いらしく、いつも邪慳に追払つていたので、そのせいだろう位に皆考えていた。

銀次はそれから後、^{のち}商売にばかり身を入れて一步も家を出ない^{うち}せいか、見る見る色が白くなって、役者のようないい男になつて

来た。自分では三十二と云っていたが、二十七八ぐらいにしか見えなかった。切れ上った^{めじり}皆と高い鼻筋が時代めいて、どこなく苦味の利いた細長い顔が、暗い店の中からニツコリして出て来ると、男でもオヤと思う位だったので、大袈裟な意味でなしに直方中の女という女の評判になって来たものであつたが、それでも銀次は固い人間と見えて、遊びに行くフリも見せなかった。どこまでもお客様大切、仏様大切といった恰好で、朝から晩まで暗い店の中で、物腰柔らかく立働らいたので、その翌る年の春頃になると、今までの店が狭くなるほど繁昌して来た。煮肴や何かも藤六と同じように朝早く自分で仕入れて来て、自分で料理するのであつたが、それが仲々器用で^{うま}美味いという評判であつた。

ところがその春頃になると又不思議な事に、あれ程執念深く直方に集中していた乞食連中がいつの間に、どこへ消えたのか殆んど一人も居なくなっていた。程近い英彦山ひこさん参りや、新四国参りの巡礼以外には探しても見当らなくなってしまった。人々はこうした現象を乞食の赤潮あかしおといつて驚いていたし、警察側でも頻しきりに首をひねっていたが、しかし、こうした奇現象の原因は容易に考えられなかった。

新暦の桃の節句の晩であつた。

いい月夜であつたが店が割合に閑散で、珍らしく客が早く引けたので、銀次はチョット表に出て前後の往来を、月の光りで遠く

まで見渡してみた。それからイツモの通りに慌しく表の板戸を卸おろして小潜こくぐりの掛金をシツカリと掛け、裏の雨戸を閉めて心張棒しんぱりぼうを二本入れた。藤六の位牌いはいの前に床を展のべて煤すすけたラムプを吹き消そうとすると、トタンに表の戸をトントンとたたく女の声があった。

「すみません。あけて下さい」

銀次はチョツトの間ま、その音を睨み付けて脅えたような顔をした。ラムプの下で屹きつと身構えをしていたが、微かにチョツと舌打ちをすると寝間着の古浴衣のまま面倒臭めんどくさいそうに上り框を降りた。イザといえば直ぐにも飛掛りそうな身構えで、低い、狭い潜くぐり戸どを開けてやると、女は直ぐに這入って来た。

十九か二十歳はたちぐらいの見るからに初々ういういしい銀杏いちようまげ髻こんがすりの小柄な女であつた。所謂いわゆる丸ボチャの愛嬌顔で、派手な紺飛白あわせの袷あわせに、花模様の赤前まえだれ垂、素足に赤い鼻緒の剥はげチヨケた塗下駄ぬりげたを穿いていた。

銀次は張合いが抜けたように、その姿を見上げ見下した。

こおんな

小女は美男の銀次に見られて真赤になつてしまった。背後に隠していた一升徳利と十円札を銀次の鼻の先に差出しながら、消え入るように云つた。

「お酒を一升。一番ええところを……」

銀次が無言のまま頭を下げてお金と徳利を受取ると、小女はよろめくように潜戸の端に凭よりかかつて頸低うなだれた。

銀次は新しい酒樽からタツプリ一升引いて小女に渡した。それからラムプをグツと大きくして、押入の端の小簞笥ひきだの曳出しから黄木綿きもめんの財布を引っぱり出して、十円のお釣銭つりを出してやった。

「姉さん、どこから来なさったとな」

と顔をさし寄せて訊いてみたが、小女はチラリと上目づかいに銀次の顔を見たきり、首の処まで真赤になつてしまった。無言のまま逃げるように潜戸の外へすべ迂り出てしまった。

あとをピッタリと閉めて、掛金をガツチリと掛けた銀次は、そのまま町の方へ去る小女の足音が聞こえなくなるまで聞き送つていた。ニンガリと笑い笑いつぶやいた。

「……へへ……とうとう来やがった。可愛相だが悪魔様デベルの犠牲だ。

へへ。待っていたぞ畜生……うまく行けあ俺の信心は満点だ。大阪の金持以上の根性になれる。へへ……義理も人情も、神も仏も踏殺して行けるんだ。怖いものなしになれるんだ。へへ。立身出世自由自在だ。へへ。待っていたぞ畜生……」

そんな独ひとりごと言を云っているうちにタツタ一人で真青に昂奮し

たらしい銀次は、緊張した態度でセカセカと身支度を初めた。

最初に此家ここへ来た時の通りの手甲てこうき脚絆やはんに身を固めて、角帯を

キリリと締め直すと、押入の前にキチンと坐った。藤六が居た時

のままになつてゐる粗末な仏壇の前に坐つて、赤い金きん欄らんの帷帳とばり

の中から覗いている茶褐色の頭蓋骨を仰ぎながら、何かしら訳のわからぬ事をブツブツと唱え初めた。それから自分の頭の毛を両

手でゴシゴシと搔きまわして礼拝し、礼拝しては搔きまわして四度ばかり繰り返すうちに、やがて猿のような卑しい冷笑を、顔一面に浮べながらスツクリと立上ると、押入の反対側の隅の小箆筥から、もう一度、黄木綿の袋を引出して、かなりの額のたか円札や銀銅貨を丁寧に数えて胴巻に入れた。同じ曳出の中に在った鋭いらしいあい首くちも中身をあらた検めてから懐中へ吞んだ。やはり押入の向側から鮑飴売りの足高あしだか盥だらを取出しかけたが又、押入の中へ投込んだ。

それから銀次は上り口に飯櫃めしびつを抱え出して、残りの飯と、店に残った皿のもので、湯漬飯ゆづけめしを腹一パイガツガツと搔き込むと、仏が生前に帳場で使っていた木綿縞の古座布団を一つ入口の潜戸

の前に投出した。ランプを吹消して、手探りで草鞋わらじを穿いて、地面べたへジカに置いた座布団の上にドツカリと坐つて、潜り戸に凭よりかかりながら腕を組んで眼を閉じた。

月の光りを夜明けと間違えたのであろう。どこか遠くで鶏とりの羽ばたきと、時を告げる声が聞こえた。

3

それから一時間ばかり経つたと思う頃、潜戸の外で微かに人の気はいがした。

シンシンシンシンシンという軽い、小さい鋸のこぎりの音が忍びやかに

聞こえて、銀次の襟首へ煙のように細かい鋸屑のこぎりくずが流れ込んだ。最前の小女こおんなが凭りかかっていた処へ横一寸、縦二寸ばかりの四角い穴がポックリと切開かれた。そこから西に傾いた月の光りが白々とさし込んだ。

銀次は潜り戸からすこし離れて坐つたまま一心にその様子を見ていた。

やがてその穴から白い小さい手が横になってスウツと這入つて来た……と思うと何かに驚いたようにツルリと引込んだ。

銀次は動かなかつた。なおも息を殺して四角い月の光りを凝視していた。

今一度小さな手がスウツと這入つて来て、掛かけがね金の位置を軽く

撫でたと思うと又、スルリと引込んだ。

銀次は依然として動かなかった。

三度目に白い小さい手がユツクリと這入って来て、掛金にシツカリと指をかけた時、銀次は坐ったまま両手を近づけてその手をガツシリと掴んだ。掴んだままソロソロと立上って手の這入って来た穴に口を寄せた。低い力の籠もった声でユツクリと囁いた。

「……オイ……貴様は巡礼のお花じやろ。……もうこうなったら諦めろよ」

「……………」

「俺の顔を見知って来たか……」

「……………」

「俺がドレ位の恐ろしい人間かわかったか」

「……………」

「わかったか……………阿魔^{あま}……………」

「……………」

「……………俺の云う事を聞くか……………」

「……………」

「聞かねばこのまま突出すがええか……………警察は俺の心安い人ばかりだ」

白い手の力がグツタリと抜けたようであつた。

銀次は片手で女の手首をシツカリと握り締めたまま油断のない腰構えで掛金を外した。黒覆面に黒脚絆、^{たすきが}襷掛けの女の身体^{からだ}を

潜戸と一いっしょ所に店の中へ引張り込んだ。同時に水のように流れ込んで来る月明りに透かして女の全身を撫でまわすと、内うちぶところ懐から竹細工用の鋭い刃先の長い、握りの深い切出きりだし小刀を一挺探り出して、渋紙の鞘と一所に、土間の隅へカラリと投込んだ。ホツとしたらしく微笑して女の覆面を見下した。

「……俺の名前を知つて来たんか」

覆面が頭を強く振った。シクシクと泣出して、

「……すみまシエン。草鞋わらじせん銭に詰まつて……」

と云ううちに覆面を除くと、最前の小女の青褪めた顔を現わしながら銀次の胸にバツタリと縋すがり付いた。シヤクリ上げシヤクリ上げ云った。

「……貴方あんたを見損なつて……」

銀次は月明りを透かして外を覗きながら何かしら冷やかに笑つた。今一度、猿のように白い齒を剥き出した醜い表情をしたと思うと、片手で潜戸を締めて掛金をガツキリと掛けた。落ちていた四角い木片きぎれで潜戸の穴を塞ふさいだ。

それから一時間ばかりの間、家の中には何の物音もしなかった。そのうちに二十分間ばかりラムプがアカアカと灯ついていたようであつたが、それもやがて消えてサインとしてしまった。

月がグングンと西へ傾いた。

方々で鶏にわとりが啼いて夜が明けて来た。

突然、家の中からケタタマシイ叫び声が上がった。魂消るたまげような女の声で、

「……何すんのかア——イ……」

「……」

「アレツ……堪忍してエ——ツ」

「……」

「……噓吐き噓吐き。ええこの噓吐き……エエツ。口惜しい口惜しい口惜しい口惜しい……」

という叫び声と一所にドタンバタンという組打ちの音が高まってきたが、それがピッタリと静まると、やがて表の板戸が一枚ガタガタと開いて、頬冠りをした銀次の姿が出て来た。銀次の背中には、

細引でグルグル巻にして、黒い覆面で猿轡さるぐつわをはめた小女を担かついでいたが、そのまま月の沈んだ薄あかりの道をスタスタと町の方へ急いだ。

女は銀次の背中グツタリとなっていた。

4

直方署の巡査部長室の床の上に、猿轡を外された小女が、グルグル巻のまま寝かされていた。銀杏いちようまげ髻むすがグシャグシャになって、横頬を無残に擦剥すりむいていたが、ジツと唇を噛んで、眼を閉じて、横を向いていた。

その周囲を五六人の警官が物々しく取巻いて、銀次の陳述に耳を傾けていた。

中央に立つた銀次は、すこし得意そうに汗を拭き拭きお辞儀をしては、横の火鉢に掛かっている薬罐やかんの白湯さゆを飲んだ。

「……へエ……お褒ほめに預るほどの手柄でも御座んせんで……へへ。あんな離れた一軒家で、前の藤六から以この来かた、小金こがねの溜まつているような噂が立っているそうで御座いますから、いつも油断しませずに、出入りのお客の態度ようすに眼を付けておりましたお蔭で御座いましょう。へエ。……この小女あまつちよが這入つて来た時に、この界隈の者でない事は一眼でわかります。第一これ位の縹きりよう緞けんの娘は直方には居りませんようで……へへ。それから一升買いに

十円札を突^つん出す柄じや御座んせんで……どう考えましても……
へエ。それで一層氣を付けておりますとこの小女^{あま}つちよ奴^めえ、潜
り戸に凭^{もた}れかかる振りをしてマン中の棧から掛金までの寸法を二
本指で計^はつてケツカルので……へエ。それから私が十円札の釣^つ銭
を出すところを、うつむいたまま氣を付けている模様ですから、
私はイヨイヨ今夜来るなと思^いました。来たら出来るだけ身輕に
しとかんと不可^いんと思^かいまして、慣れた者の飴売りの身支度をし
て待つておりますと……へエ。ツイ一時間ばかり前の事で御座い
ます。掛金の上の処を切抜きました小女^{あま}つちよが手を入れました
けに、直ぐに引^ひつ掴^{つか}まえて引^ひつくり上げて、ここまで担^かいで参
りましたので……へエ」

「成る程のう。貴様は気が利いとるのう。素人には惜しい度胸じや。アハハハハ……」

「フーム、コンナ常習犯の奴の手口は、アイソ、サグリ、ノリと云うて、三度手を入れてみるものじやがのう。最初に手を入れた時に捕えようとしても決して捕えられるものじやないがのう」

これは銀次と肩を並べている痩せ枯れた胡麻塩鬚ごましおひげの巡査部長の質問であつた。しかし銀次は平気で答えた。

「ヘエ。そげな事は一向存じまつせんでしたが、ただこの外道げどうと
思つて待ち構えておりますところへ、遣つて参りましたので思い
切り引つ搦んでしまいました……へへへ……」

「オイオイ……女……それに相違ないか」

巡査部長が靴の先で小女^{こおんな}の頭をコツコツと蹴った。

小女はヤツト眼を見開いて、冷やかに頭の上を見た。噛んでいい唇を静かに嘗^なめまわすとハッキリした声で云った。

「……この縄……解^{ほど}いてくんさい。白状するけに……」

「……ナニ……縄を解け……？……」

「……アイ……」

「そのまま云うてみい」

「イヤイヤ、このままならイヤぞい。痛うて物が云われんけに……どうぞ……」

小女は又もシツカリと眼を閉じて唇を噛んだ。訊問に慣れていいらしい巡査部長は、凹^{くぼ}んだ眼でマジリマジリと小女の顔色を見

ていたが、やがて大きく一つうなずいた。傍の巡査を腮あごでシヤクツた。

「オイ。解いてやれ」

「ハッ」

若い巡査が二人で女を抱え起して泥だらけの板張の上に横座りさせた。

これを見た銀次はチョット狼狽したらしかった。巡査達の顔を素早くツラリと見渡したまま固くなっていたが、やがて覚悟をきめたらしく、軽いため息を一つ鼻から洩らすと、縄を解くと邪魔にならないように、すこし横に立退たちいた。入口に立っている巡査の背後をスリ抜けて一気に表へ飛出せる位置に立った。古ぼけた博

多の角帯の下に、右手のおやゆび拇指を突込んで直ぐに結び目を前へ廻
わせる準備をしていたのを誰も気付かなかった。

キチンと座り直した小娘はそうした銀次の態度をジロジロと横
目で見ているようであった。巡査に取捲かれたまま縄を解かれる
と、すぐにたすき襷を外して、肩のあたりをシキリに揉もんでいた。それ
から裾をつくろいながら中腰に立上つて、膝を揉もんだり押えたり
した。そうして又もペツタリと座り込むと鬢びんのホツレを指先で搔
上げながら咳払いを一つ二つした。

「……すみません。お湯一パイくんさい。咽喉のどがかわいて叶かなわぬ
けに……」

と頭を下げて、カンカン起った火鉢の上の大薬罐に手をかける

と、思い切つて立上りさま天井を眼がけて投上げた。灰神樂はいかぐらがドツと渦巻き起つて部屋中が真白になつた。思わず飛退とびのいた巡査たちが、気が付いた次の瞬間にはもう銀次と小女の姿が部長室から消え失せていた。

5

部長室から飛出した銀次は、広間の事務室の卓子テーブルの上に飛上つた。手に触れた硯すずりばこ箱を追い縋すがつて来る小女めがけてタタキ付けると、書類を蹴散らしながら机の上を一足飛びに玄關へ出た。その腰に獅噛しがみ付いた小女は、いつの間に奪い取ったものか銀次

のヒ首あいくちを、うしろ抱きにした銀次の肋骨あばらの下へ深く刺し込んだまま、ズルズルと引擦られて行つた。

「父サンの仇讐かたき……丹波小僧……思い知つたか……丹波小僧……」

と叫び続けていた。そうして銀次と絡からみ合つたまま玄関の石段を真逆まつさかさま様に転がり落ちると、小女は独りでムツクリと起き上つて、頭から引かむつ冠せられた銀次の着物と帯をはね除のけた。倒れた椅子を避よけ避け追いかけて来る警官を振り返つて、擦り剥けた顔でニツコリと笑つた。

それから血に染まつたヒ首と両手を、向家むかいのペンペン草を生やした屋根の上の青空の方向に高く挙げて力一パイ叫んだ。悲痛な甲高い声で、

「……皆の衆……皆の衆すみません。私はお花じゃが……もう私は帰られんけに……帰られんけに……」

と云ううちに、銀次の身体からだに腰をかけたまま、血染の匕首を両袖で捲いて、白い自分の首筋にズツプリと突込んだ。そのまま涙をハラハラと流して、唇からプルプルと血を吐き吐きグツタリとなった。銀次と折重なって倒れようとしたところを走りかかつて来た巡査たちに抱き止められた。

「馬鹿ッ……」

「何をスツか……」

「馬鹿ッ……」

という巡査たちの怒号のうちに、太い血の筋を引いた二つの死

骸が、事務室の中へ引っぱり込まれた。

警察の門前から、玄関先まで間もなく人の黒山になったが、やがて走り出て来た巡查が、群集を追払って、表門と玄関をピツタリと閉め切ってしまった。

その中に玄関の石段と敷石に流れた夥しい血が、小使の手で洗い流されてしまうと皆立去ってしまったが、それでも、

「何じやったろかい」

「何じやったろ何じやったろ」

と口々に云い交わしながら、近所の人々は皆、表に立っていた。

「須崎監獄^{すさき}へ行つて取調べてみますと、どうも意外な事ばかりで

驚きました」

出張から帰って来たらしい胡麻塩鬚の巡査部長が、大兵肥満の署長の前に、直立不動の姿勢を執^とって報告をしていた。事件後、四五日目の正午頃の事であつた。

「第一、先般、御承知の一パイ屋の藤六老爺^{おやじ}が死にました時に仏壇の中から古い人間の頭蓋骨と、麦の黒穂^{くろんぼ}が出た事は、御記憶で御座いました」

署長はこの辺の炭坑主が寄附した巨大な、革張りの安楽椅子の中から鷹揚^{おうよう}にうなずいて見せた。

「ウムウム。知つとるところではない。それについてここの小学校の校長が……知つとるじやろう……あの総髪に天神髯^{てんじんひげ}の……」

「存じております。旧藩時代からの蘭学者の家柄とか申しておりますが」

「ウムウム、中々の物識りという話じゃが、あの男がこの間、避病院の落成式の時にこげな事を話しよった。……人間の舍利甲兵衛べえに麦の黒穂くろんぼを上げて祭るのは悪魔を信心しとる証拠で、ずうと昔から耶蘇教やそに反対するユダヤ人の中に行われている一つの宗教じゃげな。ユダヤ人ちうのは日本の××のような奴どもで、舍利甲兵衛に黒穂くろんぼを上げておきさえすれば、如何どげな前科があつても曝ばれる氣遣いは無いという……つまり一種の禁厭まじないじゃのう。その上に金が思う通りに溜まつて一生安樂に暮されるという一種の邪宗門で、切支丹きりしたんが日本に這入つて来るのと同じ頃に伝わっ

て来て、九州地方の山窩さんかとか、××とか、いうものの中に行われておったという話じゃ」

「ヘエツ。それは初耳で……私が調べて参りました話と符合するところがありますようで……」

「フウム。それは面白いのう。あの藤六が死んで、舍利甲兵衛と黒穂くろんぼの話が評判になりよった時分に、ちようど避病院の落成式があつたでう。校長の奴、大得意で話しよつたものじゃが、何でもこの直方のうがた地方は昔からの山窩の巢窟じやつたそうでう。

東の方は小倉の小笠原、西は筑前の黒田から逐おわれた山窩どもが皆、この荒涼たる遠賀川の流域を眼ざして集まって来て、そここに部落を作っておつたものじゃそうな。藤六はやっぱりその山

窩の流れを酌^くむ者じやったに違わんと校長は云いおったがのう。
吾輩は元来、山窩という奴を虫が好かんで……悪魔を拝むだけに
犬畜生とも人間ともわからぬ事をしおるでのう。ことに藤六は、
あの通りの人物じやったけに真逆^{まさか}に山窩とは思われぬと思うて、
格別気にも止めずにおったのじやがのう」

「へエ。そのお話を今少^{まじつ}と早よう伺っておりますと面白う御座
いましたか……」

「ふうむ。やっぱり藤六はここいらの山窩の一人じやったんか」
「ハイ。山窩には相違御座いませぬが、ここでは御座いませぬ。

元来、高知県の豪農の息子じやったそうで御座いますが、若氣の
過ちで人を殺しまして以来、アチコチと逃げまわった揚句^{あげく}、石見^{いわみ}

の山奥へ這入りまして、関西でも有名な山窩の親分になっておりました者だそうで……」

「フウム。どうしてそこまで探り出した」

「……こんな事が御座います。あの丹波小僧と巡礼お花の死骸を、共同墓地の藤六の墓の前に並べて仮埋葬にしておいたので御座います。その埋めました翌る日から、女の死骸を埋めた土盛りの上には色々な花の束が、山のように盛上って、綺麗な水を張った茶碗などが置いてありますのに、銀次の土盛の上は、人間の踏付けた足跡ばかりで、糞や小便が垂れかけてあります。夜中に乞食どもがした事らしい御座いますが……」

「ふうむ。その気持はイクラカわかるのう。山窩とても人情は同

じことじゃで……」

「ところがその親の藤六の墓は、ずっと以前から何の花も上がりませぬ代りに、枯れた麦の黒穂くろんぼを上げる者が絶えませぬそうで……どこから持つて来るか、わかりませぬが……」

「成る程のう。その理屈もわかるようじゃ。校長の話を聞いてみるとう」

「私はそのようなお話を存じませぬものですけに、いよいよ不思議に思っておりますところへ今度の事件で御座います」

「ウムウム」

「この辺の者は麦の黒穂くろんぼの事を外道花げどうばなと申しておりますので、藤六の墓に黒穂くろんぼが上がるのは不思議じゃ。何か悪い事の起る前し

兆^{らせ}ではないか……というこの界限の者の話をチラと聞いたり致しましたので、イヨイヨ奇怪に存じておりますところへ一ヶ月ばかり前の事で御座います。有名な窃盗犯で鍋^{なべ}墨^{ずみ}の雁八という……」

「ウムウム。福岡から追込まれて来て新入坑の坑夫に紛れ込んでおったのを、君が発見して引渡したという、あれじやろ……」

「ハイ。彼奴^{あいつ}が須崎の独房で、毎月十一日に腥^{なまぐさ}物を喰いやらんチウ事を、小耳に挟んでおりましたけに……十一日は藤六の命日で御座いますけに……」

「成る程……カンがええのう」

「それがで御座います。何をいうにも二人とも死んでおりますた

めに手がかりが一つも御座いませんで困りました。署員の意見を尋ねてみましても、ただこの事件と例の乞食の赤潮との間に、何か関係がありはせぬかという位の、まことにタヨリない意見で、事件の真相の報告書の書きようが御座いませぬ。そこで、ほかに手蔓らしい手蔓は無いと思いましたが、雲を掴むようなお話では御座いましたが、御留守中独断で福岡へ出張致しまして、只今の鍋墨雁八の口を撈むしりに参りました訳で御座いましたが、その時に私は思い切つて、お花が死にました時の模様を詳しく雁八に話して聞かせますと、それならばと申しまして雁八が、残らず真相どろを吐きました。涙をボロボロ流しておったように御座いますが：：つまり今度、巡礼お花に殺されました丹波小僧と、鍋墨の雁八

とは、ズット以前に石見の山奥で、藤六の盃を貰うた兄弟分で御座いましたそうで……しかも雁八が聞いた噂によりますと、丹波小僧というのは藤六の甥どころではない。藤六が天の橋立の酌婦に生ませた実の子らしいという話で……」

「……ううむ。おかしいのう。それでは……何が何やらわからんようになるかのう」

「それがその……それを知っておったのは藤六だけで、本人は知らんじやった筈と雁八は云うておりましたが……藤六はそんな風にして方々に児こを生み棄てて来た男だそうで……」

「おかしいのう。それでも……」

「もうすこしお話しがあります」

「話いてみい」

「……ところが、それから後、^{のち}藤六はその丹波小僧と雁八を一本立にして手離しましたアト、だんだん年を老^とつて仏心が附いたので御座いましょう。今一人居ります娘が、九州で巡礼乞食に化けて、女白浪^{おんなしらなみ}を稼いでいるのに会いたさに、自分の縄張^{おにが}を鬼城^{じょう}の親分に譲つて、石見の山の中から出て来て、この直方まで来て、落付いておりましたものらしく、集まつて来た乞食共の中には、藤六の跡を慕うて来た奴どもが相当居つたものらしい御座います。……と申しますのは、つまり藤六が悪魔様に上げている黒穂^{くろんぼ}を頂くと、自分の前科が決してバレぬ。一生安楽に暮される守護符になる……というので……もつとも雁八はその貰うた黒^くおまもり

ろんぼ
穂を白湯で飲んだと申しましたが……ハハハ……」

6

署長は感慨深そうに腕を組んで眼を閉じた。

「成る程のう。それでわかつたわい。ツイこの頃までこの筑豊地方に限って、小泥棒こぬすが一つも居らんじやつた理由わけがわかつたわい」
「……ハイ……藤六という奴は余程エライ奴じやつたと見えます」
「そうすると丹波小僧の銀次も、藤六のアトを慕うて来た仲間じやな」

「いや、違います。丹波小僧は、藤六の処を出て、鍋墨の雁八と

も別れてから後^{のち}、大阪地方専門の家尻切り^{やじりき}になりましたが、或る処で居直つて人を殺したお蔭で、手厳しく追いこくられましたので、チョット商売にオジ氣が付きましたものか、飴売に化けてこつちへ流れて来ましたが、偶然に藤六の店に目を付けてみますと、思いがけない藤六が住んでいる。しかもスツカリ耄碌^{もうろく}している上に、相当の現金をシコ溜めていることがわかりましたので、それこそ悪魔の本性を現わしましてコツソリ^か彼の軒屋に忍び込み、藤六の夜食の飯の中へ鼠^{ねずみとりぐすり}取^ね薬^りか何かを交ぜて、毒殺して後を乗取つた……」

「……エツ……そんなら親殺しじやな」

「ハイ。知らずに殺しました訳で……」

「それでも怪けしからん話じや。あの時に診察した医者是谁じやつたな」

「ハイ。この間坑夫と喧嘩して殺されました新しんにゅう入の炭坑医で」

「ウハツ。あの若い医師いしやか……」

「ハイ。狂染なじみの芸者が風邪を引いているのを過つて盛り殺した奴で……」

「……そうかそうか……あの医者にかかっちゃ堪まらん……フム
フム。それからドウなった」

「それと知りました藤六の乾兒こぶんどもが、皆この直方に集まつて来て評議をしました。それが、あの乞食の赤潮で……それから皆で手分けをして、本四国を巡礼しておりました藤六の娘のお花を探

し出して、相手が実の兄である事を秘^{かく}いて、仇討をさせようとした……それを銀次が感付いて、裏を搔いて逃げようとしたのが今度の騒動の原因であつたと雁八が申しますので……話の模様を考え合わせてみますと、どうやら雁八が黒幕らしい御座います……」

「ウムウム。ようよう経緯^{すじみち}が、わかつたようじや。彼奴等^{あいつども}は復讐心が強いでのう」

「道徳観念が普通人と全く違いますようで……」

「……それもある……が……しかし……」

と云ううちに署長は何やら考え込んだ。いつもの癖で、椅子の中に深く身を沈めると、中^{ちゆうはげ}禿^{はげ}の頭を撫で上げながら、自慢の

長い鬚^{ひげ}を自烈度^{じれつた}そうにヒネリ上げヒネリ下^{さげ}した。

「フム。それで……自殺の原因は……」

「ハイ。それがで御座います……ソノ……」

巡査部長は困惑したらしく額の汗を拭いた。

「……わかりませんので……その……僅かの際に致しました事で……全くその……私どもが狼狽致しましたので……縄を解けば白状すると申しましたので……その……」

「ウムウム。それは聞いちよる。……問題は自殺の原因じや。復讐を遂げると直ぐに自殺しよった原因じや」

「……………」

「死に際に何も云わんじやったか。巡査どもは何も聞かんと云い

よつたが」

「私は聞きました。皆の衆。すみません……と……」

「皆の衆……その皆の衆というのは山窩の連中に云うた言じやろう……表の群集の中に怪しい者は居らんじやったか。様子を見届けに来たような者は……」

「ハッ。それは居らなかつた筈……と雁八が申しました。お花という女は、まだ生^{きむすめ}娘では御座いましたが、ナカナカのシツカリ者で、わたし一人でキット親^{かたき}の仇を討って見せるけに一人も加勢に来る事はならんと云うておりましたそうで……又、誰か仲間^{うち}が見ておられますれば、警察まで担^{かつ}がれて参りまする中に、途中でお花を助け出します筈……」

「ウムウム。それは理屈じゃが……しかしお花は、丹波小僧が実の兄という事を、どうかして察しておりはせんじやったかな」

「イヤ。そんな模様には見受けませんでした。御承知の通りツイ夜明け方の一時間ばかりの間の出来事で御座いますけに……丹波小僧が何もかも先手を打って物を云う間もなく猿轡を噛まして、担いで来たと申しておりましたが……実地検査の結果もその通り
のようで……」

「フーム」と署長は考え込んだ。

「彼奴どもあやつのする事は一から十までサツパリわからん。切支丹と似たり寄ったりじゃ」

「……………」

「ウム。まあ良^ええ。それ位のところで調書を作ってくれい。自殺の原因は発狂とでもしておけ。警察の中で人を殺したのじやからナ……ハツハツ……」

それから署長は椅子の中で伸び伸びと大欠^{あくび}伸をした。両手を高々と天井に突き伸ばして顔を真赤にした。

「アア……アア……ツと……厄介な奴どもじや——」

青空文庫情報

底本：「夢野久作全集」ちくま文庫、筑摩書房

1992（平成4）年9月24日第1刷発行

初出：「オール読物」

1934（昭和9）年12月号

入力：柴田卓治

校正：土屋隆

2005年9月17日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

w.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

骸骨の黒穂

夢野久作

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>